

朔北に

(昭和四十六年寮歌)

伊藤正朗君 作歌・作曲

一

朔北に^{さくほく}手稻^{ていね}風の^{おろし}咆哮^{こえ}絶えて
静寂^{しじま}に痛^{いた}し遠汽笛^{とおきてき}
凍^いてつく雪原^{はら}に寒月^{かんげつ}の
蒼^{あお}き光^{ひかり}の射^さしそえば
聳^{ボブラ}天樹^{かげ}の影^{かげ}は猛^{たけ}くして
虚空^{そら}指^さす彼方^{かなた}宿^{やど}り舎^やの
灯^ひは今宵^{こよひ}また旅人^{たふびと}の
継^つぎ培^{つちか}いし迪^{みち}を諭^{さと}せり

二

朝焼^{あさや}けて南^{みなみ}に風^{かぜ}の起^たつ聞^きかば
北^{きた}の都^{みやこ}に春^{はる}近^{ちか}く
雪融^{ゆきと}け水^{みず}の溢^{あふ}れては
豊水^{ほうすい}の岸^{きし}塵^{ちり}高^{たか}し
黄^きばむ空^{そら}ゆく鳥^{とり}もなく
土^{つち}の香^かぞする野幌^{のほろし}路^じを
孤^{ひと}りそぞろに辿^{たど}る日^ひは
異郷^{いきよう}の旅^{たび}を思^{おも}ひ侘^わぶかな

三

はろばろと続^{つづ}く沃野^{よくや}の玉葱^{ねぎ}畠^{ばたけ}
金^{きん}に輝^{かがや}く北^{きた}指^さして
延^のびる鉄路^{てつろ}の傍^{かたわら}に
か^{いし}の石狩^{いしかり}の文学^{ぶんがく}碑^ひ
濁^{にご}れる川^{かわ}に臨^{のぞ}みては
沈^{しず}む夏陽^{なつひ}に涙^{なみだ}する
回^{かい}顧^こ百年^{ひゃくねん}忘れずや
この地^ち拓^{ひら}きし先人^{せんじん}の夢^{ゆめ}